

<書評>

**Vincent Crapanzano 著**

***Serving the Word: Literalism in America from the Pulpit to the Bench.***

New York, The New Press, 2000 年, 406 頁, 18.95 US ドル

丹羽 充\*

2001 年 9 月 11 日の同時多発テロ以降、キリスト教「原理主義<sup>1</sup>」は日本のマスコミでも盛んに取り上げられ問題化されるようになった。しかし、テロ発生の一年前、後に広く興味を持たれるであろうことを先取りするように、ヴィンセント・クラパンザーノはキリスト教「原理主義」を批判的に検討する著作を出版していた。

『言葉に仕える：説教壇から法廷に到るアメリカのリテラリズム<sup>2</sup>』という書名からも分かるように、本書はキリスト教「原理主義」と司法の場における「原意主義<sup>3</sup>」の二つの領域を分析することを通し、リテラリズムについて批判的に論じたものである。それにしても、宗教と司法という一見かけ離れた二つの領域を結びつける想像力に評者はいささか驚かされてしまう。人類学ゆえの発想であろうか。

では、早速内容に即して紹介をしていきたい。まずは以下に全体の章立てを挙げておく。

序文 (Preface)

序論 (Introduction)

第一部 説教壇 (Part I—The Pulpit)

1. 選定 (Election)
2. 聖化 (Sanctification)
3. 歴史 (History)

第二部 法廷 (Part II—The Bench)

4. 憲法 (The Constitution)
5. 創設 (Foundations)
6. 意図 (Intention)
7. 先例 (Precedent)

---

\* 一橋大学大学院社会学研究科修士課程

<sup>1</sup> “fundamentalism” の訳として「原理主義」とした。他に「根本主義」という訳が挙げられ、キリスト教の文脈ではこちらの方が主流であるが、「原理主義」の方がより一般的に用いられるためである。

<sup>2</sup> “literalism” の訳として「直写主義」「直解主義」などの訳があげられるが、より一般的に流通していると考えられる「リテラリズム」とした。テキストの隠喩的な解釈を認めず、字義通りに受け取るべきだとする立場を意味する。

<sup>3</sup> “originalism” の訳として「原意主義」とした。憲法は制定時の意図に従って解釈されるべきだとする立場を意味する。

## 結論 (Conclusion)

「序文」で著者は、まず「原理主義」と「原意主義」を事例として米国のリテラリズムの諸相を追究することを表明する。宗教と司法という一見かけ離れた二つの領域をリテラリズムというキーワードによって結びつける理由は、「アメリカの社会的・文化的生活において、現実的かつ象徴的な意味を持っているためである」(p. xvii)と述べる。

次に、著者は本書を執筆するに当たっての方法論を明らかにする。章立てからも分かる通り、本書は「原理主義」について論じた第一部と、「原意主義」について論じた第二部から構成されている。前者に関しては主にフィールド・ワークのデータを用い、後者に関しては主に書かれたテキストをデータとして用いることが明らかにされる。

「序論」では、著者はテキストと人間の関係についての議論を一通り検討しながら、テキストを行為遂行的(performative)に捉えようとする自らの立場を明らかにしている。ここで注意を促しておきたいのは、著者が人間ではなくテキストを行為遂行のエージェントとして把握しようとしている点である。つまり、「原理主義」者は聖書を「宇宙、社会的世界、その習慣、その法律」(p.16)を作り上げるテキストであると捉える。そして、現実と聖書に乖離があれば人間の墮落の状態(man's fallen condition)がその理由であると説明し、乖離をなくす方向で行動する。彼らは自らを聖書に即して生きるよう動機付けられている。

「原意主義」者にとっては「理念と現実の乖離に、神学的な理由付けは不要である」(p.16)。ただ、その乖離を埋めることこそ、彼らの使命(profession)なのである。

第一部の冒頭の章題「選定」は「神に選ばれる」ということを意味している。本章では、先行研究とエスノグラフィックなデータを用いて、プロテスタント福音派の一部の極端に保守的な「原理主義」の歴史的背景と現状が描かれている。「原理主義」者によると、「選定」とは彼らが「神によって救われる」という謙虚(humility)な態度の表明であるとされる。だが、同時に自らの判断において神に自らを捧げるという「自己責任の賜物としての救済」をも唱える。そのような彼らに対し、著者は或る疑問を持つ。「選定」と「自己責任」の語りにおいて「福音派キリスト教に内在的な曖昧さがある。果たして誰が物語のヒーローなのであろうか」と(p.33)。

「原理主義」者は、著者の「原理主義」へのアカデミックな関心を解さない。むしろ著者が彼等に関心を抱いていることを「神がこのきっかけを与えた」として捉えており、故に著者は回心を迫る対象と見做されるのである。例えば、キリスト者になる前にギャングのリーダーであったボブ・マーレイという男に、著者は回心を迫られる。しかし著者は、或る時「好戦的な過去の態度と対応しているような(現在の)彼の暴力性」(p.83)を感じ逃げ出してしまふ。

第二章は「聖化」と名づけられ、前章の「選定」とは別の側面から「原理主義」者の語

りが描かれる。「聖化」とは「信者の内面の状態を変化させるプロセスであり、自分自身をキリストの性格・情動・行為のイメージに模す」(p.122) 訓練である。「生まれ変わり<sup>4</sup>」の経験から、自分自身を聖書に即した存在とさせようとしている「原理主義」者が描き出されている。「聖化」の帰結は以下になる。「神と人間の距離が縮まれば縮まるほど、キリストの再臨を待つ人と人との距離も縮まり、慈愛溢れる交友(fellowship)が形成される。しかし、この交友は原理主義者をそれ以外の他者と分断することになる。その他者は良い人であるのかも知れないのに」(p.149)。

第三章の「歴史」では、聖書を基盤とした「原理主義」者の歴史観念について論じている。彼らにとって聖書の内容は過去の歴史のみならず予言<sup>5</sup>でもある。「原理主義者と歴史について話していると、彼らが年代という観点からよりも(聖書の)真実・権威という観点から、『聖書的』『ポスト聖書的』と呼ばれるような区分をしていることに気が付いた。つまり、彼らにとってすべての歴史は、聖書に包みこまれているのだ」(p.161)。

本書に引用されているように、人類学者のハーディングは、「原理主義」者が先述のような歴史観も含め「物語と出来事(story and event)」を分けない思考を持つことを指摘しているが、著者はこの点に批判的である。実際は、彼らにとって「物語と出来事」は同じものでなければならないのであって、訓練の賜物としてそれを実現していると言う。この訓練によって、進化論者が化石を論拠にしていれば「化石は神が創ったものだ」(p.192)と反論し、「単純に議論を成り立た」(p.192)せないような思考を「原理主義」者は手に入れるのである。

「憲法」の章から本書の第二部である「原意主義」の分析に移る。「原意主義」者はその名の通り、自らの主観を排し、立憲者の「原意的な意図」を重視しようとする。これに対して、著者は最初に自らの主観を排することができるという彼らの前提こそが危険なものであることを指摘する。

米国において、憲法(the Constitution)は広く神聖視されている。しかし、著者は小文字から始まる「constitution」という言葉が「制定」という意味を持っていることに言及し、行為遂行的な性格を喚起させ、憲法(the Constitution)の権威に疑問を投げかける。そして、権威への懐疑を徹底させるべく、歴史的資料を援用しながら憲法(the Constitution)に権威が付与されていく様子を描いている。

「創設」の章は次のような逸話から始まる。ナショナル・アーカイブに収められている「それ」に見入った子供が父に向かってこのように言う。「ただの言葉じゃないの」(p. 229)。父は、言う。「でも、これが源なんだよ。これがアメリカという国を作ったんだよ」(p. 229)。

<sup>4</sup> 「生まれ変わり(born again)」は、「救済による魂の生まれ変わり」であり、バプテストやペンテコスタルなどのプロテスタントの一部において救済の証として重視されている。

<sup>5</sup> 「預言」ではなくあえて「予言」とした。聖書が未来を先取りしているという文脈であるためである。

著者は、このようなオリジナルなものへの回帰、あるいは憲法に対して実体化して感じてしまう一種のフェティシズムなどは、ポストモダニズムに対する反発であり、実はわれわれはそのような世界の中で生きているのである、と言う。多くのポスト・モダニストたちが言うように、あらゆる価値の相対化された世界の中に生きているというわけではないのだ (p.232)。

続いて、議論は解釈における一般的な次元へと展開する。言葉というものは、客観的であることもなく、中立的であることもなく、フェアであることもなく、またテキストだけによって決定されるものでもない。意味は常に揺れを伴っており、議論や交渉を避けることはできないと言う。

「意図」の章においては、その名の通り「原意主義」者が重視する「意図」という概念が分析される。「原意主義」者の主張を理論的に検討し、心理学から文芸批評までさまざまな領域を横断しながら彼らの主張を批判していく。

まず、著者は「意図」という概念の不明瞭さを指摘してこう問いかける。「意図」とは正確には何を意味しているのだろうか。他者の「意図」など、どのようにして分かるのだろうか。自らの「意図」ですら分かりにくいのに。

しかしながら、著者は他者の「意図」を想定しなければ、あらゆるコミュニケーションは有意性も解釈可能性も維持できないことは認める。重要なのは、「意図」は常に仮設的であって、読み手とテキストの交渉の上にしか成り立たないことを認識することなのである。特権的な「原意的な意図」を想定してしまうことがそもそも誤謬の始まりなのである。

第二部最終章は、「先例」である。殆どの司法行為は、憲法ではなく先例を参照して進められる。当然「原意主義」者は「原意的な意図」に従わない先例は、破棄しようと企てる。著者は、人類学に対する批判に倣って「原意主義」者の試みを批判する。フィールドで人類学者はインフォーマントに様々な質問を投げかけるが、インフォーマントはそれらの質問について考えたことすらない。つまり、質問に対する答えは、質問を受ける以前には存在していない。憲法も同様で、個々の事例が問題になる前に「意図」というものが存在しているわけではないのだ。

「結論」は著者の倫理的な態度の表明から始まる。「私は法律家や裁判官に対しては激論で対応してきたが、原理主義者たちに関してはずっと控えめに扱ってきた」 (p.324)。その理由として著者は「原理主義」者との触れ合いで憤りも感じたが、他方でむやみに自らを制約し、著者が人生で価値があるものと認める多くのことを受け入れようとしない彼らの生き方に哀れみも感じていたことを告白している。

次に、著者のリテラリズム批判は、宗教や司法以外の場所にも向けられていく。例えばリテラリズムによって言葉の意味が固定されることと、民主主義との複雑な関係について議論が展開される。さらに、宗教や司法の場ほどには極端ではないが、リテラリズムは実は米国の支配的な解釈スタイルであるという。著者はブラジル人の同僚に、「私のような

ブラジル人には、あなたたち米国人はすべてリテラリストに見えてしまうよ」 (p. 343) とされる。

続いて、リテラリズムを本質主義と図像表象主義 (iconic representationalism) との中間に位置づけようと試みる。本質主義は深いレベルでものごとの背後に本質を想定する態度である。一方、図像表象主義は表層レベルで一つのイメージが端的に他のものを表すことを無批判に受け入れる態度を意味している。これらとの関連においてリテラリズムを考えてみると、それは本質主義よりも浅いレベルで、だが図像表象主義よりも深いレベルにおいて、道徳的な (行為遂行的) 実践によって、意味の固定性を持続させる試みであると著者は述べている。

本書の紹介は以上である。

『言葉に仕える (Serving the Word) 』。それにしても、なんという皮肉な題名であろう。評者の調査<sup>6</sup>において、リベラルなキリスト教徒たちが「世界に仕える (Serving the World) 」という言葉で、自らの「信念」を語っていたことを思い出してしまう。この言葉遊びは本書では言及されていないので、著者が「意図」しているかどうか不明だが。

著者が当惑するように、評者も調査中に「原理主義」者の語りがあまりにも閉ざされた体系であることに対して興味を持ちながらも途方に暮れたことがある。このような聖書の中で完結する、閉ざされた思考と語りは、後にフッドらによって、「テキスト内モデル (Intratextual Model) <sup>7</sup>」として理論化されることになる。

本書で評者が物足りないと感じた点は、「創設」の章における、憲法の聖化を大きなコンテキストに接続する部分である。同系の問題として土着主義運動や「原理主義」を含む「根本原理を探し求める運動」を挙げることができる。それは急速に世界中に拡散しており、極めて重要な問題である。しかし、著者は紋切り型の指摘しかしておらず、また十分な説明に紙面を費やしていない<sup>8</sup>。

意味の固定化に対抗する本書はポストモダン的な著作である。が、著者は同時にポストモダンに完全に身を投げることの不可能性、あるいは、その短絡的な態度には批判的である。著者はこのように言う。「私は、本質主義から完全に自由である思考を想像することができないことを告白したい」 (p.353)。意味に対する自らのバイアスを積極的に引き受けた上、しかし、だからこそもっと気楽に意味の不安定性と戯れることの面白さを伝えよう

---

<sup>6</sup> 評者は、米国南部において「原理主義」を含む保守福音派の調査を行っている。

<sup>7</sup> Hood, R.W., Peter C. Hill, and W. Paul Williamson 2005 を参照のこと。

<sup>8</sup> 「根本原理を探し求める運動」は、ポストモダンやグローバル化などが「価値を相対化」したことへの反発として論じられたり、あるいは「価値の相対化」の一般的過程においてノスタルジックなアイデンティティ希求が発生するために起こると論じられてきた (Robertson 1992 を参照のこと)。だが、評者は、実際に「原理主義」に携わっている人々にそのような明確な「意図」を見ることができず、上記の語り口に対して、研究者が運動者にエージェンシーを一方向的に付与しているように感じてしまう。

としているように評者には感じられた。

### 参考文献

Crapanzano, Vincent

2000 *Serving the Word: Literalism in America from the Pulpit to the Bench*,  
New York: The New Press.

Hood, R.W., Peter C. Hill, and W. Paul Williamson

2005 *The Psychology of Religious Fundamentalism*, New York: The Guilford Press.

Robertson, Roland

1992 *Globalization: Social Theory and Global Culture*, London: Sage Publication.